
「醸す」文学シリーズ

YSR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「醸す」文学シリーズ

【コード】

N4223H

【作者名】

YSR

【あらすじ】

この話はフィクションです。主人公ばかりにいい思いはさせませんよ。

(一) ケロロ軍曹

—

「ケロツ、今、誰かが話しかけてきたような・・・」

夜中。ケロロ軍曹は、ふと、体を起こした。

地球に来て三日目。日向家の地下室内で生活しているケロロ軍曹。その正体は、ケロン星から派遣された侵略者である。

電気を付けて前後左右を見回す。誰も居ない。ケロロ軍曹はほっとした。

「ホッ。どうやら気のせいでもありますな」

そう言っつて電気を消そうとしたその時。

「無視すんなよ」

背後から、さっきの音が聞こえた。

「だ、誰でありますか!?!」

驚いたケロロは即座に後ろを向いた。すると、そこには。

「俺たちか？俺たちは、P・クリソゲヌムだ」

・・・緑色で、頭に棒状の物体がたくさん生えている小さな生物を、ケロロは見た。

「ケロツ・・・」

知らなかったのだろう。ケロロは、たじろいだ。

「へー、知らねえんだ、俺たちのこと」

「初めてなんだな」

「これだからドーブツってやつは・・・」

その生物らが言い合っているのを5秒ほど眺めていた後、ケロロは質問した。

「・・・で、君たちは、何でありますか」

「さっきも言っただろ。『P・クリソゲヌム』って。要するにアオ

カビだよ」

「アオカビも知らないとか言うんじゃないだろうなカエル」

その言葉にケロロは怒った。

「・・・わ、我輩はカエルじゃないであります！ケロン星ケロン軍ケロロ小隊隊長、ケロロ軍曹であります！」

「へー、ってことはもしかして宇宙人？」

「すっげー」

「もしかしくなくても宇宙人であります！この地球を侵略しに、ケロン星から派遣されたのであります！」

そうケロロが言うと、クリソゲヌムから意外な返答が来た。

「ふーん。・・・じゃあもう遅いな」

「え？」

「だって、地球はとくに俺たちに征服されてるもん」

その言葉にケロロは驚愕した。

「な、なんですとー!？」

そう叫ぶのを無視して、クリソゲヌムはさらに言葉が続けた。

「地球の端から端、成層圏ギリギリから深海の奥深くまで、俺たち菌が征服—（生活）しているのさ」

「じゃ、じゃあ、冬樹殿や夏美殿、ママ殿も征服しているのでありますか」

「勿論さ！表面から体内まで、びっしり住み着いてるもん」

「俺たちがいなければ生きていけないんだよなあ、人間ホモサピってやつは」

「いまさら頑張ったって無駄無駄」

その言葉に、ケロロは深く傷ついた。

二

「そ・・・そんな、あんまりであります。それじゃ我輩らは、何のためにこのペコポンまで来たのでありますかっ！」

ケロロが涙目にそう言っていると、今度は左から、別の声が聞こ

えた。

「ちよつと調子に乗りすぎじゃないか？」

「ケロツ」

ケロロが左を向くと、そこには黒く、突起状の物が上・右・左部分に突き出している生物がそこにあつた。

「泣くなそのカエル」

「だからカエルじゃないでありますっ」

「そうなのか．．．我々はトリコイデス。クロカビと言われる者だ」

「クロカビ．．．あ！風呂場にいるヤツ！」

「そうだ。人類だけでなく宇宙人までもが我々を蹂躪するとは．．．」

「す、すまないであります．．．」

トリコイデスとケロロが話していると。

「．．．お前ら、完全に俺たちのこと無視してるな」

「あ、ご、ごめんであります！」

「中途半端な情報で物を語るなアオカビ」

「うるせー！どこが間違つてんだよ！」

「途中からだ．．．そのカエル」

「ケロロであります！」

「すまん、ケロロ。これから、本当のことを話そう．．．」

三

そこから、トリコイデスの説明が始まった。

「我々が地球を支配しているのは本当だ」

「そ、そうなのでありますか．．．」

「ただ．．．」

「ただ？」

「ケロロも知っているだろうが、我々は弱弱い存在だ。小さく、

弱く、人間ヒトによって簡単に殲滅されることが多い。それでもなんと
か現在まで生き残っているのだ」

「ケロ……」

「そして、この地球に生物がいることによって生きながらえている
者も多い」

「……」

「そして、その生物も我々に生かされている一面もあるわけだ」

「そ、そうなんですか……」

「最後にケロロよ」

「ケロ？」

「仮にもしこの地球をケロロらが征服したとしても、文句は言いま
い。気にしないタチだ。だが、それでも我々のことを忘れず、平和
にやってほしい」

「頼んだぞ、カエル」

「……うっす！」

四

それから日は過ぎ去り、リビングで。

「軍曹ー、なにやってるの？」

冬樹を見ると、ケロロがなにやら皿の上に湿った食パンを持って
いる。

「ああこれ。食パンにカビを生やしてみるのであります」

「なんでそんなことするの？」

「いやー、ずっと前にこいつらに言われたんであります。『我々を
忘れるな』って」

「へー」

そうして話していると、夏美がリビングに入ってきた。

「ただいまー」

「お帰り、姉ちゃん」

「お帰りであります夏美殿！」

「うん。・・・な！？なにやってんのボケガエル！」

「え？どうしたのでありますか？」

「なんで濡れた食パンがお皿に乗ってるのよ！すぐにカビちゃうじゃない！」

そう言っただけで夏美は、お皿を手にとって食パンを捨てようとした。

「ち・・・ちよっと待っててくださいであります夏美殿、これには深いわけが・・・」

「何が深いわけよ！どうせ悪だくみでしょ！？」

「違うであります・・・あー！！！」

ケロコの訴えを無視し、夏美は湿った食パンをゴミ箱に放り投げた。

「ケローーーー！」

部屋にいたカビたちが咳いた。

「・・・バカだなあのカエル」

(一) ケロロ軍曹(後書き)

・・・『ケロロ軍曹』です。

ケロロ、菌にかなりいじられそうですねー。

そこからへんから、このシリーズを思いつきました。

これからは菌の紹介がてらに様々な人物を登場させる予定です。
お楽しみに。

(二) 鋼の錬金術師(前書き)

注：前話とは違って一人称です。ご了承ください。

(二) 鋼の錬金術師

—

それは、忙しい仕事の合間であつた。

「何を言っているんですか大佐。まだ書類は残っています」

リザはああ言っているが私は疲れている。たまには息抜きと言うものも必要だろう。

「大佐はいつも息抜きしすぎなんすよ」

う……。言うではないか、ハボック少尉。しかし、人間の集中力にも限界が……。

「【集中力】適切な手がかりに注意を向ける能力、及びに戦闘中などにその注意集中を持続する能力。集中力向上のためには……（以下略）」

……うう。

ええい、何か、この中の中にいる私以外の者が全員出動するような事件が事故が起こらないものか。

「そんなに都合よく事件は起こりませ……」

その瞬間。窓の外から轟音が聞こえた。

「なんだ!？」

外を見ると、建物の一部が吹き飛んでいる。跡を見ると、どうやら人為的な物らしい。人影も見えた。

「暴動つすかね……」

「だろうな」

私の部下が口々につぶやく。あれを鎮圧するのは……軍の仕事だろう。

「こつち（東方司令部）の管轄内だしな……。よし、行け！」

「『行け』って……。そんな嬉しそうに……」

少々愚痴りながらも、彼らは行ってくれた。あの規模では、すぐ

に収まるだろう。

さてと。私にはこつちがある。

そんなことを思いながら、私は机の下に置いてある赤ワインを手
に取った。

その瞬間。しゃがれた小さな声がした。

「のんきな男だな」

二

「・・・何の声だ？」

私は周りを見渡した。しかし、勿論、誰もいない。

こういう時決して気のせいなどは思わないのが軍人というもの
である。私は、赤ワインのボトルをじっと見つめた。

するとそこには・・・、しわしわの顔をした小さな何かが、ボト
ルの中を漂っていた。

「！」

一瞬驚いたが、私は疲れているのである。きっと幻覚・・・。

「幻覚な訳がないだろう」

・・・。間違いない。こいつだ。こいつがさっきから喋っている
んだ。

「・・・お前は何者だ？」

真面目に聞いてみる。すると。

「ほう。わしらが見えるようだな、マスタング大佐」

「・・・なぜ私の名を知っている？」

「さっきまで仕事をしていただろう。書類にそう書いてある」
・・・確かに。

「・・・なるほど。私が疲れていたから私の名が分かったってこと
か」

「まあそうだな・・・さて」

「ん？」

何だ？私は耳をそば立てる。

「このきついふたを開けてくれ。今のままじゃ話しづらいじゃろ」
「む……」

気付いたときには、丁度、電話のようにボトルを近づけていた。
うっむ。一理ある。

そこで私は、机の中にあつた栓抜きで栓を抜いて、机の上に置いた。

そうすると、中にいたそいつが、ゆっくりとボトルを登っていき、そして、ボトルの口から外にポンと出た。

「ふー。やっと出れたわい」

「……」
改めてそいつを眺める。小さい。指で簡単に掴めそうなほど小さい。
い。

「……というより、気が付いたときには、そいつを掴まんでいた。
何をするっ」

そいつは体（と言っても顔より小さいが）を左右にふりふり動かしながら、必死に逃れようとしていた。……かわいい。これで顔が可愛ければ、絶対に人気が出るだろう。

「……改めて聞こう。お前は何者だ？」

私がそう聞くと、そいつがこう答えた。

「わしか？わしは、ラクトバチルス・フルクチボランスだ」

三

「……フルクチ？」

「もう一度名乗れ」

「ラクトバチルス・フルクチボランスだ」

「もう一度」

「……わしを馬鹿にしておるのか？マスタング大佐」

「だったら何なんだ？その『フルクチ』とやらは」

「まあ、『学名』と言うヤツだな」

「・・・学名だったのか。」

「・・・名を聞いているのに学名を答えるのかお前は」

「むう・・・ならば言おう。わしは所謂『火落ち菌』だ」

「火落ち？」

「・・・聞いたことがない言葉だったので、とりあえず聞き返した。そうだ。わしら火落ちは、日本酒が好きでな。よく集まったりしとる・・・」

「・・・どう考えても腐敗菌だろう、これは。」

「・・・とりあえず、『人類の敵』と言うことでいいんだな？」

そう言っただけは、指を構えた。

「・・・ちよつと待て」

「何だ？」

「わしらは別に腐らすだけが仕事じゃないぞ」

「・・・ほう。それは何だ？」

依然、指は構えたままである。

「わしらはな・・・マロラクティックとか言う発酵が出来るんだ」

「マロラクティックって・・・あのマロラクティック発酵か？」

「そうだ」

マロラクティック。それを聞いた瞬間に、次の用語が脳裏に浮かんだ。

【マロラクティック発酵】酵母がおこなうアルコール発酵に対して、乳酸菌が行う発酵。葡萄由来の有機酸であるリンゴ酸を乳酸と炭酸ガスにする。これによって、ワインの酸味が柔らかくなり、微生物安定性が増す。

「・・・と言うことは、お前は乳酸菌だな？」

「そうだ。と言うより、さっき学名を言っただろっ？若くしてボケてきて・・・」

「それ以上言っただけをお前を塵にするぞ」

「・・・わかった」

なんとというジジくさい菌だ・・・。私はそう感じた。

「大佐」

「何だ？今私は急がし・・・！」

遠くに目をやると、そこには、鎮圧を終えて、横一列に並んだ部下達の姿があった。

「なるほど・・・皆が出払ったスキにこっそりとワインを楽しむ気だったんすね」

「いや、それは・・・」

「じゃあ、何でワインのふたが？」

「いや・・・」

「大体大佐は普段から息抜きしすぎです」

「・・・あ」

ふと気が付くと、あの菌の姿はいなくなっていた。

「どうしたのですか大佐」

「いや、今そこにあっただんだがな・・・」

「・・・ワインがか？」

「いや、そこにちっさいのが・・・」

「話を逸らそうとしても駄目です！」

【故意】わざとすること。その気持ち」

・・・ああ。なんだっただんだ今は・・・。

そう心の中でため息をついていると、耳元であの声があった。

「まあしっかりやんな、大佐さんよ」

(III) NARUTO

—

それは、ある雨の日の夜のことだった。

彼女はその日、不穏な夢を見た。花に水を遣るのを忘れて枯らせてしまう、と言う夢である。

その夢を見終わる途中で、彼女は目を覚ました。そして、不安に駆られながら、彼女は店の方に向かった。

彼女の実家は花屋である。当然、花は商売道具であり、重要な物であった。だからこそ余計に不安になった。

明かりをつけると眠っている親に迷惑がかかると考え、彼女は懐中電灯を持ち出した。そして、店内の花の状態を確かめていった。

「これもよし。こつちもよし。後は・・・」
そうして彼女は、鉢植えの方に電灯を向けた。

その瞬間。彼女は目を疑った。

鉢植えの土の上に、なにやら小さな生き物らしきものがうごめいているのである。

まばたきしてみた。首を振ってみた。ありえないが念のために幻術返しもしてみた。

しかし、その生き物はいまだに鉢植えの土の上を舞っていたのである。

じっと目を凝らしてみる。どうやら幻ではなさそうなので、触ってみる。すると、ぷにぷにとした感触がした。

(なにこれっ!?)

その感触に一時驚き、そしてその感触に嵌っていった。

三回くらいぷにぷにしていると、流石に気が付いたのか、その生き物が動き出した。

(やっぱり・・・でもかわいい!)

つまんだまま顔に近づけてみる。目と口があり、小さいながらもある。

そんな観察をしていると、その生き物は彼女にこう叫んだ。

「離せこの白髪娘ー！ー！！」

「えっ！？」

突然叫んだことに驚いて、彼女はその生き物を鉢植えの方に放り投げた。投げられたにも関わらず、その生き物はまだしゃべり続けている。

「まったく・・・驚いたかと思えばすげーじろじろ見やがって・・・なんなんだよお前は！」

彼女は少し申し訳なく思った。・・・しかし。彼女はその生き物の言い方に腹が立った。

「ご、ごめん・・・でも『白髪娘』とかはないでしょー！名前で呼びなさいよ名前で！」

「なんでだよ！」

「いつも店先に置いてあげてるでしょー？それなのに私の名前も知らないわけ！？」

そこまで聞くと、その生き物は即答した。

「んな訳あるか！お前の名前ぐらい知ってらい！」

「・・・じゃあ言ってみなさいよ」

するとその生き物は叫んだ。

「ああいいさ。お前の名前は『山中いの』だ！」

二

「・・・正解」

「当たり前だ！売れずにずっとこの店にいるんだからな！」

それは、少し流行遅れとなった観葉植物であった。

「それは・・・ちよっとごめん」

いのも少し謝る。

「・・・しつかしお前はツイてるな。俺たちの姿を見られるなんてな」

「え？」

「俺たちは本来、ホモサピなんかに見えるはずは無いんだ」

「・・・え？つてことは・・・精霊か何か!？」

「んな訳ねえよ!俺たちは、この鉢植えに棲んでいる菌だ」

「・・・菌？」

それを聞いて彼女は、一歩ほど後ずさりした。

「何を引いているんだ、お前?いつも触ってんじゃねえか」

「いや、なんか、つい・・・」

「どうせ生きてる人間なんか醸せやしねえよ。言うなれば死骸専門だな」

「・・・なんか気持ち悪い言い方するわねあんた・・・」

「別にいいだろ。事実なんだし」

「・・・そうなの？」

「俺はT・ハルジアナム。・・・おい、みんな出てこーい」

彼がそう言うと、鉢植えの土から、彼のような小さな生き物がぽこぽこ出てきた。

「僕はB・サブチリス。枯草菌。まあどこでもいるよー」

「私はE・クロアカ。まあ、私もどこにもいます」

「わたくしはG・エツニカタムでございますのよオホホ」

「・・・どこにでも」なのが多いわね・・・」

「いのがそうこぼすと、菌たちが口々に返した。

「仕方ねえだろ?小さいころ砂場とか土に触れてないホモサピなんていねえんだし」

「空気中にも浮いてるしねー」

「『土を火に焼く』なんてことでもしない限りまあ生きていますし」

「わたくしは文字通り植物の根となって生活していますの」

その言葉にいは聞き返した。

「・・・『根』?どういうこと?」

すると、G・エツニカタムは、いのにこう語った。

「あーら、花屋だと言つのに知りませんのね。まあ別に構いせんが……」

「……嫌味のつもり？」

「いえいえ。口調は単なる癖ですよクセ。どうも植物と言つのは一人で生きるのは苦手で、わたくしめらの力を借りるのです。それで、菌糸を伸ばして、栄養を植物の送っていますの」

「菌糸……」

「つまり植物はわたくしめらが育てているようなものです。まあ、植物もそう思っているのかもしれませんがね」

「ふーん……」

「……あのさー」

「え？何？」

「あのさ、僕の友人にB・ナットーって奴がいるんだけどー」

そうして、菌達の話は、一晩中続いたのだった。

三

「いの。……いのっ」

「……はっ」

彼女は目を覚ました。

「どうしたんだいの。……心配になって見に行つたうちに寝ちやつたか？」

「あ、お父さん……」

いのは、周りを見渡した。近くにはお父さんがいる。

「あのまま寝ちやつたのか……」

彼女はそう思った。……その時。

「あっ……」

「どうした？」

彼女は唐突に思い出した。昨日の晩、菌が見えて、そして……。

彼女は決意した。

「あのね、お父さん」

「・・・そうか。いのもあれを見たのか」

「え？お父さんも？」

「ああ。小さい頃だった。確か・・・用を足すために起きて、その帰りのことだったなあ。ふと見ると、鉢植えがほのかに光っているんだ。近づいてみると、なにやら小さな生き物がちよこまかとうこめいている。それを弄ったりしているうちに朝が来て・・・まあ、その後はいのと同じだ」

「へえ・・・」

「その後は見ていないな・・・いの」

「え？」

「その経験、忘れるなよ」

「うん！」

その後、あの鉢植えは買われていった。

あの生き物たちはどうなるのだろう。買われた先でも動き回っているのだろうか。そう考えると、彼女はなんだか可笑しくなった。

「ふふふっ」

「なんだいの。休憩中に突然笑い出すなんて」

シカマルがそう言うと、彼女は否定した。

「ううん。なんでもないの」

そう。あれは、他の人にわかるものじゃない。

そう思いながら彼女は、すくつと立ち上がったのだった。

(四) ドラえもん

—

私があの子達を見たのは、そう、いつものようにお風呂に入っていた時のことだったわ。

湯船に漬かっていると、右の肩の方から声がしたの。

「こいつ風呂入りすぎだろー」

「生き残るの大変だよな」

勿論私は驚いたわ。で、すぐにそっちの方を向いたの。

すると・・・肩に、なんだか小さな生き物達が動き回っていたの。

「きゃあ!」

思わず立ち上がって、もう一度肩の方を見たの。でも、まだその生き物達はいるの。

試しに聞いてみたわ。

「あの・・・」

「なんだ?」

「俺達になんか用か?」

「てか俺達のこと見えてるの?」

「え!?!?・・・まあ・・・」

「まじでっ」

「すげえじゃん!」

「やっとこいつも気がついたんだなあ」

もう一度聞いてみたの。

「あの・・・」

「しかし風呂かよ・・・」

「一番厄介な場所か・・・」

「だから・・・」

「今更見えてどうすんだよ」

「だから聞いて!」

あら、いけない。思わず叫んじゃった。

「うるせえなあ、聞こえてるよ」

「おう」

「あの、聞きたいことがあるんだけど・・・」
「やっと質問できるわ。」

「なんだ?」

「あなたたち、実はドラちゃんの秘密道具じゃない?」
「・・・は?」

だってそうでしょ? 変な生き物が見えるなんて。だから、最初に
思ったことはそれだったわ。

でも、違った。

「ちげーよ」

「なに言ってるんだよー」

「やっと見えたのにそれかよ」

私、とっても混乱したわ。だったら、いったい何なのよ?

「じゃあ、あなたたちは何?」

すると、こんな言葉が返ってきた。

「俺達?俺達は『菌』だよ」

二

「きゃあああ!」

思わず桶でお湯をかけたわ。だって、汚いモノだと考えてたんだ
もの。

全部流れたかな? と思って肩の方を見ると、なんと、まだいた
の。いくつかだけ。

「全く・・・いきなりなにすんだよ」

「死んだかと思っちまったじゃねえか」

「い、ごめん・・・」

思わず謝ったわ。だって、なんだかかわいそうになったんだもの。

「そもそもお前、勘違いしてねえか？」

「……え？」

「『菌』ったって、悪いヤツもいりゃあ良いヤツだっているんだ」

「……そうなの？」

「知らねえのかよ」

初耳よ。……あ。

「そう言えば、乳酸菌とかは体に良いって……」

そう言つと、彼らは露骨に嫌な顔をしたわ（目が点だから分かり

づらいけど……）。

「『乳酸菌』ねえー」

「あいつだけ良いよな」

「世の菌の名誉一手に引き受けてんじゃないか？」

「……じゃあ、あなたたちは？」

聞いてみた。と言うか、それが一番聞きたかったことだけど。

「俺達？」

「俺達は……」

そして、同時に叫んだの。

「俺達は、『表皮常在菌』だっ！……！」

「表皮常在菌？」

「知らないかー」

「だよなー」

……いや、知らないわよ。

「まあ俺達は、一言で言えば、お前の皮膚を守っているんだ」

「守っている!？」

「まあ正確には、フツーに生活してるだけだけどねー。皮脂食って

「生かせてもらって感謝してるぜ」

「あ、ありがとう……」

……なぜか感謝されたりして。

「あー、ちょっと」

「え？」

何？

「こつから先は、ちと長くなるが、いいか？」

「え・・・まあ、いいけど・・・」

三

「そもそも俺達は、なんだかんだで皮膚の表面に住んでる」

「うん」

「なんせ皮膚の脂を栄養にできるからな。こんなの、他の奴らにや
できないことだ」

「へえ・・・」

「しかも皮膚の脂は弱酸性。聞いたことあんだろ？」

「そういえば化粧品の中とかで聞いたことがあるわね」

「お前さんのような無茶若いには要らないんだかな・・・まあと
にかく、俺たちにとっちゃ天国ってことだな」

「ふんふん」

「でもなあ、それでもあいつらはやってくるんだよなあ」

「・・・例えば？」

「例えばなあ・・・真菌、所謂カビだ」

「か・・・カビ!？」

「なあに、珍しいもんじゃない。そこらへんにあるぜ。見てみな」

「そう言われて、私は周りを見回したわ。すると。」

「もう漂白とか止めてくれよな」

「黒カビとか、

「かもせー」

「青カビとか、

「やっぱここら辺はいいねえー」

「なんだかよく分からないカビ（ススカビ）とか、とにかく菌がた

くさんいたわ。

「すっごい……」

「大体のホモサピは知らねえことだが、要はどこでもいるってことだな」

「で、そいつらが時々やつてくるって訳だ」

「毎回迎え撃つたりしている訳だが……」

「『だが』？」

「一番の迷惑は、お前のような奴だな」

「……え？」

そんなこと、言われるなんて思っていなかった。

まさか、自分が。

「……どういうこと？」

「まあ手を洗ったりするのはまあいいとしよう」

「でもなあ、しょっちゅう風呂に入ったりとか、それも毎回しつかりやるもんだから迷惑なんだよ」

……あれ？

「どうして？体を洗ったら、その、カビとかがいなくなるじゃない」

「そうだ。……だが、『俺達まで一緒にいなくなる』んだ！」

「！」

そっか……そうだよね……。

「勿論俺達はタフさ。全滅何てまず無い。でも、それが元に戻るまでに、隙が出来る」

「その隙にワキガ菌とかが占領しちまったら膠着状態になるんだよ！」

「だからってまた洗い流すと、同じことの繰り返しだ」

「そっか……」

「分かるだろ。つまり、『洗い過ぎは臭くなる』ってことぞ」

「……でも、風呂は好きだし……」

「それは分かるがな・・・」

「せめて回数を減らすとかしろよ。そうすりゃ、『誤って』覗かれる』なんてこともないんだ」

「そ、そうだよね・・・」

まあ確かに。時々、のび太さんとかドラちゃんがやってくるものね。

「まあ、そうして俺達と仲良くしてりゃ、良いことはあっても悪いことなんてねえ」

「幸せになれよ」

「えっ・・・」

四

「しずかー」

あ、ママだ。

「はい」

「いつまで入ってるの、のびちゃん達が来てるわよー」

「はい」

まあ、確かに、臭いのは嫌だもんね。

そう思いながら右肩を見ると、彼らはいなくなっていた。

「消えた・・・」

そう一瞬思ったけど、違うわ。

消えてなんかいない。

彼らは、私を守ってくれているの・・・いつまでも。

(四) ドラえもん(後書き)

えー、今度はしずかちゃんです。お分かりいただけただけでしょうが。ぶっちゃけた話、イチイチ本編を読み直しているわけではないので(別に単行本持っている訳じゃないし)、口調とか呼称とかが違うのかもしれないかも、ご了承下さい。でも、雰囲気は伝わったんじゃないかな・・・と思っています。

(五) クロサギ(前書き)

今回は菌メインではありません。あ、沢木も出てきます。

(五) クロサギ

—

とあるアパートの一室。ベッドの周りに食べ終わったカップ麺の容器や袋などが散乱する部屋の中で、その携帯は鳴り響いた。

「・・・なんだよ親父」

「仕事だ」

「誰からだよ」

「わしの古い友人からの依頼だ」

「へえ、あなたに友人なんていたんだ」

「まあな・・・」

「で、どんな手口で？」

「いや、今回は詐欺ではない」

「は？」

「その逆、『人に信じさせる依頼』だ」

「なんだよ、『人に信じさせる依頼』って・・・」

その男は、ベッドから出てくると、すぐに服を着替えた。

「いつもの服装でいつか」

そう言つて男は、いつもの黒いコートを身にまとつた。

すばやく髪を整え、インスタント食品で軽く食事を済ませ、歯を磨き、そして男は家を出た。

すると横には、ごみを捨てていった後と思しきはんてんを羽織つた女がこちらを見ていた。

「また詐欺の依頼？」

あきれたような声で、女は男に聞いた。

「人聞きの悪いこと言うなよ。俺は『人助け』してやってんだぜ？」

「詐欺師から金を巻き上げて、でしょ？しかもそっちの収入がある」

のに家賃はしっかりと徴収するし……！」

「安い家賃で住まわせてもらってるだけマシと思えよ！そもそも今回は詐欺の依頼じゃねえし」

「……え？」

「向こういわく、『人に信じさせる依頼』だよ」

「ふーん……」

「なんだよ、その言い方」

「だって、そんな依頼なんて滅多に無いことじゃない」

「まあ、そうだけだな。……あ、そうそう」

「？」

「クロの世話、よろしく」

「……」

しばしの会話の後、男はアパートから離れた。

その男の名は、「黒崎」である。

「あなたが……『黒崎さん』っすよね？」

「そうだけど、それが？」

黒崎は、駅前の喫茶店にいた。端の一席で、ある男と同席していた。

その男の名は沢木。短い金髪の、背の低い青年である。

「バナナパフェ2つにショートケーキにティラミス……よくそんなに食えるっすね」

「まあな。甘い物は好きだし」

半ばあきれ気味な顔で沢木が黒崎を見ていると、黒崎の方から話を切り出した。

「……そう言えば、あんたが『人に信じさせたいこと』ってなんだ？」

「あ、そうっすね……」

「俺だって暇じゃないんだ。大した事じゃなかったらやる気も出ないっすもんさ」

「うーん、『大した事』じゃないかも知れないんすけど・・・」
「うむ」

「俺、菌が見えるんすよ」
「・・・は？」

二

「菌が見えるなあ？」

「そうっす」

「肉眼で？」

「勿論っす」

「ホントかよ・・・」

黒崎は、あまり信じられないといった顔付きでため息をついた。

「ホントっすよ！嘘じゃねえっす！」

「・・・じゃ、どんな風に見えてるんだ？」

「まあ、こんな感じっす・・・」

そう言つと沢木は、紙とペンを取り出し、たまたま手の上に載っていたオリゼーを描きだした。

「・・・いかにも漫画だな」

「まあ、そうなんすけどね・・・」

「じゃあ何？空気中とかにいつぱい見えたりすんのか？」

「そりゃもう。おかげで映画館では映画よりこいつらが気になって仕方ねえっす」

「なんか目口があるんだが・・・しゃべるのか、こいつが？」

「それどころか会話すら成立するっすよ。つかめたりするし」
「・・・」

(こりゃ、厄介なヤツと遭っちまったな・・・)

黒崎は、悩ましい顔付きで手を顔に当てた。

「あの・・・大丈夫っすか？」

「いや、いい・・・これも依頼だからな」
「？」

「まあ、受けてやる。とりあえず、どうやってあんたの能力を納得させるかだな」
「うつつす！」

それから黒崎は、少しの会話の後、喫茶店を出た。

「農大・・・だっけ」

「そうっす。そう言えば道案内も頼まれていたんだっただっけ」

「おいおい大丈夫かよ」

「まあ、心配要らないっすよ」

それから二人は歩き続け、そして、「自給自足」と書かれた大きなモニュメントがそびえ立つ校門前まで来た。

「農大か・・・」

「まあ、来たことなんて無いっすよね。軽い大学紹介ぐらいなら時間的にも大丈夫っす」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「え？」

「普通に大学なんて来るの初めてだったもんな・・・」

「そうなんスか？」

高校に進学したものの、中退。そのような過去を持つ黒崎にとって大学は全く縁遠いものだった。せいぜい、政和大学に「仕事」のために出向いたぐらいである。

「まあな・・・」

二人が歩いていると、横から豚や牛などの畜産物が、作業服を着た学生らしき人らと一緒にすれ違っていった。

「・・・なんで豚が・・・」

「まあ農大っすから」

そして二人は、樹教授の研究室に着いた。ドアを開けると、樹と長谷川と武藤が出迎えた。

「沢木くんお帰り」

「うっす」

「あ、君が黒崎君だね？僕はここの教授の、樹慶蔵です」

「お、おう」

「こっちが院生の長谷川君、あっちがゼミ生の武藤君だ」

「あなたが例の黒崎君ね」

「ふーん・・・意外と可愛い顔してんじゃん」

黒崎は、「可愛い」と言う言葉に反応した。

「う・・・うるさい！で、なんだ？なんでも、『及川』ってやつにこいつの能力を信じさせたいんだって？」

そう言つて、黒崎は、沢木の方を指差した。

「その通りだよ黒崎君。・・・及川くん」

「はい」

返事の後、及川が二人の前に姿を表した。

「・・・お前が及川か」

「そうだけど・・・『お前』は止めてよね」

「ふむ・・・騒音は心配無さそうだが、家賃は滞納しそうな顔だな」
「な・・・なんでそんなことが分かるのよ!」

及川が即座に反応した。・・・当然である。

それに対して、樹が及川に説明した。

「まあ気分を害さないでよ、及川君。黒崎君はこの年で、アパートの大家さんなんだよ」

「だからって・・・」

気分を害され、及川は少しむくれていた。

「それじゃあ早速、準備でもしますか」

「え？」

「こいつが『ホンモノ』かどうかの、ね」

その後、沢木は部屋から出された。

「・・・そこまでするんすか？」

「そりゃそうだろ。チェックは厳密にしなくちゃな」

「・・・」

そして、黒崎によつて、『本当に菌が見えるか』のチェック方法の説明がなされた。

「まず、菌が入っているシャーレと入っていないシャーレを用意する。但し、普通の人の見た目で見分けがつかないように、同じように白金耳などで跡をつけるのがコツだ」

「ふむふむ」

「で、それをそれぞれ同数作る。・・・まあ、20個づつあれば完璧だな」

「そ、そんなに!?!」

「まあ、あるっちゃあるけどね・・・」

「まあ、各1個づつでもいいんだけど、万が一ミスがあった際に連続正解されてしまうこともありうるからな。ガン付きの牌を使わないようなもんさ」

「・・・」

「そして、そのシャーレ群は見えないようにしておく。まあ、ついたりなどで隠すのが普通だな」

「ついたり・・・あつたつけ？」

「まあ適当なものでいいじゃない」

「そして、シャーレをランダムに出す。・・・自分で混乱しないように、どっちを出したか記録しておくんだな」

「まあ、『見分けがつかない』しね」

「そして一定回数行つて、正答率を出す。ま、でたらめでも半分は当たるんだから、厳しめに考えるべきだな。・・・以上だ」

そう黒崎が言うと、及川が聞き返した。

「・・・それだけ？」

「ああ、それだけだ」

「意外と簡単な方法ね・・・」

「仕方ないだろう？あまり時間かけても面倒だし」

「それもそうね・・・」

そこから、チェック用のシャーレが生成された。とは言っても、

「見える」か「見えない」かなので、滅菌したシャーレを40個用意して、その内の20個のシャーレのふたをパカッと開けて閉めるだけで済むのだが。

「・・・おいおい、そんなにあっさりでいいのか。せつかく培養について少しは勉強したのに・・・」

そう黒崎が言うと、長谷川が反論した。

「何言ってるの。空气中にだって菌はわんさかいるのよ？それだけでも十分実験になるわ」

「・・・」

準備が終わり、長谷川が沢木を呼んだ。

「来なさい、沢木」

四

研究室の扉が開く。

「やっとなつか・・・」

「そうよ。だけどせいせい1時間じゃない」

「1時間ってデカイっすよ・・・」

「まあ、ね・・・とにかく沢木、その椅子に座りなさい」
「うす」

そう言われて沢木は、前に机とついたら代わりの木の板が置かれた、普通のパイプ椅子に座った。

そして沢木は、木の板に空いた、手が通るほどの穴に気がついた。
「なんすか、この穴？」

「ああ。元々空いてたのよ。使い道が無くて困ってたけど、こんな時に使うなんてね」

「……」

「ここから及川が2種類のシャーレをランダムに出すわ。種類は簡単、菌が入っているかないかよ。そのどちらかを予想して、紙に書いてもらう」

「『予想』も何も、普通に分かるっス……」

「まあ、そう言うだろうけどね。で、20回実験した後、正解率を見る。全問正解の確率は、……でたらめだと100万分の1未満ね」

「だからでたらめじゃないっス……」

「我慢して。ある意味及川のためなんだから」

「『ある意味』ってなんスか……」

そして、チェックが始まった。

ついたての穴から、シャーレが通された。

沢木が見ると、培地の上で、菌が歩き回っている。

「イェーイ」

「かもしやすいぞ」

「これからどうするよ」

その様子を見て、沢木は紙に記入した。

「これは『ある』つと……」

10分も掛からずに、チェックが終了した。

「その穴から紙を提出して。後ペンもね」

「へいへい」

沢木は紙とペンを、その穴から通した。

「えーつと……1問目……2問目……」

ついたての向こうから、及川が採点する声が聞こえる。

その声は、次第に焦りを帯びてきた。

「9問目……10問目……え、これも！?……」
だから言ったのに……と、沢木は心の中でつぶやいた。
そして。

「19問目……20問目……全問正解……」

そこまで言った後、沢木と彼女らの間のついたてが取り払われた。
「まさか、全問正解するだなんて……」

及川が、トドメを差されたかのような顔つきで、沢木に言った。

「まあ、当然の結果ね」

長谷川が追い討ちをかける。

「うう……」

及川がうなづけている間に、樹が黒崎に語りかけた。

「どう？黒崎君。すごいでしょ」

「……それ、本人が言うことでしょ」

「まあ、そうなんだけどね……本人の方は、どうもそんなに喜ばしいことだと思っていないらしい」

「?何でだ?使えるじゃねえか」

「そうなんだけどね……」

五

その後、黒崎は、スナック「桂」まで戻ってきた。

「親父……」

「なんだ。もう戻ってきたのか」

「いやさ……なんだよ、この『報酬』……」

「十分だろう。向こうは農大の学生、現物支給が基本だろう」

「いや、『現物』って言っても……」

黒崎が持つ紙袋の中には、野菜類と、大学のパンフと、そして厳重に包装されたシユールストレミングが入っていた。

紙袋からシユールを取り出してカウンターに置き、黒崎は嘆いた。

「なんでこんな物騒な物をお土産として選ぶかねえ。そもそもこれって、テレビだと臭い爆弾にしか使われてないもんだろ？大丈夫なのか？」

「・・・シユールストレミングは、主にスウエーデンで食べられているニシンの缶詰（ ）だ。ニシンを詰めた後殺菌をしないため、発酵がどんどん進んで最終的にはパンパンに膨れてしまう。その為、野外で開ける事が推奨される珍しい缶詰だ」

「殺菌しない・・・道理でパンパンなんだな、これ」

「気圧変化で破裂する危険がある為に、船舶で運ぶしかないのかなか貴重なものだ。とは言え通販でも買えたりするがな」

「・・・で、食べるのか？」

「食べなければ食品では無いだろう。かなり塩辛いので、ジャガイモなどの副菜はしっかり用意する必要がある。まあ、それ以前に匂いでダウンする者も多いがな」

「親父・・・」

「ん？」

「そんなに詳しいって・・・食ったこと、あんのか？」

「・・・まあな」

それを聞いた瞬間、黒崎は吹き出しそうになった。

(あの親父が・・・シユールパーティーを・・・！)

・・・が、さすがに黒崎は必死にこらえた。

「どうかしたか？」

「い、いや・・・」

その時桂木は、とんでもないことを口にした。

「食べてみるか？」

「・・・は？」

「見るからに限界が近いからな。そろそろ食べごろだろう。解禁日も過ぎている」

「・・・マジで？」

「大丈夫だ。エプロンと手袋はワシが貸そう。・・・早瀬」

「はい」

「缶切りを」

そして、ドアを封鎖して、三人によるシールドパーティーが開かれたのだった。

黒崎は感じた。

(か、勘弁してくれええー！！！)

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・殺菌をしないため、日本の法律的には「缶詰」では無い。

(五) クロサギ(後書き)

かわいいそんな黒崎(笑)・・・そんなことを言っただけはシニカルに失礼ですね。

今回の話は、「もやしもん」第7巻が終わった後と考えると書きました。せっかく告白したのに、受け入れてもらえない沢木君はかわいそう・・・これはこれで誤解を招くか(笑)

よく考えれば、桂木も語りそうですよね、樹先生バリに・・・つて、「クロサギ」本編でも結構しゃべるか。親切的なフィクサーですな。

今回は・・・最終回になるかも知らないかも。

(六) もやしもん(前書き)

やっと最終話です。長かった・・・。

(六) もやしもん

—

夜。美里の部屋の中で、沢木は一人、思索していた。

俺は、これからどうなるのだろう。

くだらだらと大学生生活を続けてその後はどうなるんだろうか。

いや、分かっている。

実家のもやし屋に残って、跡を継ぐ。それが、俺の運命なのだろう。

兄貴の影響でこうして農大にいるが、その兄貴のせいで、結局実家へ逆戻りすることになるのだ。

勿論。親の意向を無視して進む道もある。

樹先生や長谷川さんの言うとおり、自分の「能力」を生かして社会に出るのも良いだろう。むしろ、その方が、自分にも良いと思う。

・・・ところが、だ。

そうすればどうなる？ずっと昔から続いてきた、沢木もやしが消えてしまうことになる。自分の、自分らがいた場所が。

しかも、蛭は俺がもやし屋を継ぐと思っている。その気持ちを裏切ることになりはしないか。

それは、沢木には耐えられないことだった。

俺は、どうしたらいいのだろう・・・。

「どうしたんだ、ただやす」

「！」

沢木は驚いた。この声、どこから。

周りを見渡すと、そこには沢山のオリゼーが、沢木を取り囲んでいた。

「お前ら、聞いてたのかよ」

「当たり前だろ？俺達のお陰でただやすはここにいるようなもんだ」
確かにその通りである。実家はもやし屋。オリゼーらの種麴を生み出すのが仕事。まさしく菌に生かされているのだ。

「そりゃそうだけどよ・・・」

沢木は嫌な顔をした。

東京に上京したのは、そんな実家の匂いが嫌になったからだということもある。

「そもそもお前ら、実家でもね工のになんで俺に付いて行ったんだ」

「・・・え？」

「分かんねえのか、ただやす？」

オリゼーに驚かれ、沢木はきょんとした。

「・・・？」

すると、オリゼー達は、互いに集まり合って、口を揃えてこう言った。

「そりゃ、お前が好きだから決まってるだろ」

二

「・・・好き？」

「そうさ。普段喋る奴なんて同じ菌ばかり。だから、ただやすのよ
うなホモサピは格好の話し相手なのさ」

「話し相手か・・・」

自分は話し上手でもない。それなのに「格好の話し相手」と菌に
言われる。正直、微妙だ。

そんな複雑な心理を、直保は抱えていた。

「そう言えば、お前らの人生ってどんなんだよ」

ふと、聞いてみた。すると。

「人生？そんなの、ただやす達が一番良く分かってるだろ？生まれ
るも死ぬも麴の中。見れば分かんじゃねえか」

「そう言う意味じゃねえよ！」

沢木は叫んだ。突然大声を出したせいか、周りの菌達は少し沢木から離れた。

沢木の話は続いた。

「・・・どんな感じなんだよ」

「どういうことだ」

「実家じゃ、『でんぷんを糖に変える』だけだろ？」

「まあ、な・・・」

「そりゃそうだ」

「そうしてお前らは増えて、時々売りに出されて、増えて、売られて。その繰り返しじゃねえか。楽しいのか？辛いのか？どっちなんだよ」

「・・・」

沢木の言葉に、周りにいた菌達は静まり返った。

しばらくして、1匹のオリゼーが口を開けた。

「楽しいぞ」

三

「えっ？」

突然声が聞こえたので、沢木は聞き返した。

「楽しいに決まってるんだろ」

「・・・何でだ？」

「『何でだ』って、楽しくなきゃこんなことやってらんねーだよ！」

沢木は驚いた。単純な作業。それを、楽しんでやっている、と言うのだから。

周りのオリゼー達も続いた。

「そうだそうだ！」

「醸すことは俺らの生きがいだぞ！」

「でんぷんを糖に変えて何が悪い!？」

「お前ら……」

沢木はただただ驚いていた。久々に、彼らの叫びを聞いたのである。

「ただやす」

「何だよ」

「結局お前はどうしたいんだよ」

「どうしたいって……」

先ほどまで考えていたことである。

「お前がどうしようが、俺らの知ったことじゃない。実家を継ごうが、学者になるうが、俺たちには関係ねえよ」

「『関係ねえ』って、俺が実家継がなかったら沢木もやしはどうなるんだよ」

「そう思うなら継げばいいだろう」

「……」

「ホモサピの事情なんて関係ねえ。栄養があれば、どこだって生きていけるさ。そうだろ？」

「そうして菌は今まで繁栄してきたんだ」

「だけどな、ただやす」

「なんだよ」

沢木は聞き返した。

「自分が好きになれることをしろよ」

「……自分が好きになれること？」

「そうさ。『能力を生かす』たって、機械みたいに働くんじゃつまらねえ。そんなんなら芸人になった方がマシだね」

「楽しんでなきゃやってられねえし、第一つまらないだろ？」

「お前らホモサピは俺達よりよっぽど長く生きるって話じゃねえか。羨ましいぜ」

「ま、そうは言っても菌も楽しいんだけどな」
「時間はまだあるんだ。ゆっくり考えようぜ」

「ああ」

四

目を覚ますと、目の前にはこたつがあった。

「ああ、俺、こたつで寝たのか・・・」

体を起こす。昨日、長々と話をしたせいか、少々寝不足だ。

からだをあらかたこたつから出したところで、机の上に、ある物が乗っていることに気がついた。

「なんだこりゃ・・・」

それは、一切れの食パンだった。

「俺、食パンなんか出したかな・・・？」

そう言っつて、沢木は食パンを手を取った。無論、捨てるためである。

だが、沢木の顔は、笑顔であった。

その食パンには、こんな模様があったのである。

「かもせ さわき」

(六) もやしもん(後書き)

やっと終わらせました。正直、嬉しいです。

最初に思いついたのはケロロ軍曹の物でした。なぜかはよくわかりませんが。

そうしてたらだら書いていって、最後はやっぱり沢木。彼以外に誰が締めると言うのでしょうか。

最後まで読んでいただき、誠にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4223h/>

「醸す」文学シリーズ

2010年10月8日15時31分発行